

「民主党 波瀾の航海」

これは日本の「痛憤の現場」を歩きルポしてきた著者が新政権への思いを辛口の提言で綴った叫びの書だ。「読すると、所信表明演説における鳩山首相の「無血平成維新」と称した与野党逆転劇があながちオーバーでなく、戦後築き上げられた民主主義が首の皮一枚でつながっていたことを痛感する。

最低投票率の規定のない国民投票法成立や教育基本法前文の「平和」から「正義」への文言変更、事態に応じた武器使用を認める自衛隊法の項目追加、業種を選ばぬ労働者派遣法改悪、年金天引きの後期高齢者医療制度……。これらを著者は11章に分け細かく分析する。そこから自公政権の国民不在体質を責めつつ、民主党にエールを送るだけでなく、日頃から国民自らが政治への参画意識を持ち、責任をもってチェックをしていく必要性を訴える。重要なのは「政権交代」という単なる看板の据え替えではなく、国民が政治へのリテラシー（活用能力）を身につけ、方向やプロセスの決定権は自分たちが握っているという実感を取り戻していくことなのだ。

さらに、とかく経済不況を主因として語られる時代の閉塞感や個々の不安感の根っこが、けっしてそれだけでないことも見えてくる。その最たるものが旧政権が進めてきた言論統制だ。マ

鎌田 慧著

スコミへの圧力でつくりだされる偏向した報道や、ヒラ配布の規制、勇気あるジャーナリストの取材源秘匿に対する司法からの攻撃等、枚挙に暇がない。

また、著者の新政権の一番の危惧としては原発政策が上がる。燃料電池やバイオマスなど新エネルギーの力強いアピールに比し、原発についてのマニフェストへの表記の少なさに、かつて使用済み核燃料の再処理工場（青森県六ヶ所村）の問題点を浮き彫りにした経験から、原発容認の匂いを看破する。現時点では表にこそ出ていないが、軍隊との交戦権を否定する憲法9条2項の削減を狙っているという指摘も聞き逃せない。

帯文の「平和革命に進め」これが本書の主眼のようだ。権力に阿らぬ著者ゆえに説得力ある一冊と言える。

評・宮本誠一（NPO法人夢屋プラネット代表）

アストラ・1789円

